

かささぎ通信 第120号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2022年 12月 9日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二三年十一月「森三郎の作品を読む会」では、「うんすんガルト」『赤い鳥』[1933.2]所収作と、少国民文芸選『かささぎ物語』[1942.8]（帝国教育会出版部）所収作の読み比べをしました。

「うんすんガルト」とは現在のトランプにあたるものです。安土・桃山時代にヨーロッパから伝わったカルタを日本化したもので、「カルタ」の言葉そのものがポルトガル語の carta からきています。「うんすんガルト」の呼称はカードの呼び名の内の「ウン」（意味：一）と「スン」（意味：最高）によるものです（『日本国語辞典』『国史大辞典』参照）。『赤い鳥』（一九三三年二月号）に掲載された「うんすんガルト」は、この珍しいカルタを与市が寺子屋に持ってきたことが発端です。十二歳の長吉が習字の稽古をしていると、隣に座っている与市からそのきれいな模様のカルタを見せられ、欲しくてたまらなくなり、「一枚でいいから何かと、とつかえてよ」と頼みます。初めは拒んでいた与市は、長吉の家にある絵草子との交換を持ちかけます。絵草子は妹のものなので長吉もさすがに躊躇しますが、結局は次の日に持ってくる約束で、赤い菱形の印の付いた女の人の絵札を一枚もらいます。長吉は帰宅してから、桜炭が赤くおこった火鉢のそばでその絵札をじっと見ているうちに、大きな黒船の中にひきずりこまれます。そしてカルタの中の女の人に手を引かれて木の台に寝かされ、話に聞いたエレキテルをかけられているような恐怖に襲われます。長吉は手に持っていた絵札を夢中で火鉢の中に投げ込みます。絵札は一瞬にして灰になってしまいました。その後、長吉からお姫様の絵の付いた絵草子をおくれと頼まれた妹は、事情が分からないものの、真っ青い顔をした兄のただならぬ様子に、涙をためながら大切な絵草子を兄に渡します。この時初めて長吉は「あんなカルタ札なんて欲しがらなければよかった」と後悔します。

この話には、江戸時代の寺子屋の様子、父親が早くに亡くなって母親が切り盛りする呉服屋の様子など、長吉の生活の様子が詳しく書かれています。その中で、友だちの持っている珍しいものが欲しくなる子ども

の心理とそれを手に入れるまでのかけひき、みぞれの中を傘もささずに駆けて帰る長吉のワクワクした気持ち、一人で異国の人の顔の絵札を見ているうちに湧き上がる不安感、友だちとの約束で妹の大事な本を取り上げる罪悪感と自責の念が次々と描写されて行きます。「一枚でいいから」と与市に迫る長吉、「一枚でも欠けたら父ちゃんにおこられるよ」「一枚ぐらいわかりやしないよ」というやり取りが、トランプのことを知っている立場で読むと何とも滑稽です。自分の無茶な頼みを黙って聞いてくれる寂しそうな妹を見て「かわいそうでたまらなくなりました」という長吉の思いを読んで、妹の健気さにつらくなります。

一方、少国民文芸選『かささぎ物語』の「うんすんがるた」は題材は同じですが、構成がずいぶん違います。「よつちゃん、おくれよう」と「朝の続き」を始めるという場面から話が進行し、妹の本と交換に貰う約束をし、やっと与市から渡される場面で初めて「おらんだのうんすんがるた」という種明しがされます。灰になってしまったかるたを前に長吉がまだぼんやりしているところへ、妹が長唄を歌いながら入って来るところで話は終わります。明日持って行かなければならない本を巡って妹とどんなやりとりがあるか、これから起こる場面への緊迫感が残ります。妹の本は、『赤い鳥』版ではお公家様やお姫様が大勢付いている絵草子でしたが、与市が欲しがるとしては違和感がありました。しかし少国民文芸選『かささぎ物語』版では「柳下亭の児雷也の合巻」というにぎやかな豪傑の話で、与市が欲しがりそうな本ですが、妹の愛読書には似つかわしくありません。習字のお手本も、『都路往来』という東海道の宿場名を織り込んだ手習い書の具体的名前を出しています。謎解きのような場面展開、江戸時代の具体的な本の名前など、執筆当時の三郎の関心に沿った書き直しという印象が色濃いうような気がしました。

次回予定 二〇二三年一月十三日（金）午後一時半～三時半

① 読み比べ「猿」〔赤い鳥〕[1933.3] 所収作と『かささぎ物語』

[1942.8] 帝国教育会出版部所収作)

② 「梅と水仙」〔うづひすの謡〕[1943.8] 所収作)